

水郷柳川における生活の場・遊び場としての掘割に関する考察

石本大歩

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

福岡県柳川市は有明海沿岸の平坦な低地に位置し、近世に作られた掘割と呼ばれる水路が縦横に張り巡らされている。掘割は土地の水捌けや城下町の防衛、灌漑用水路、船による輸送路、飲用水・生活用水の供給などの役割を担い、生活の中で重要な意味をもった。しかしながら、各家庭に上水道が整備される高度経済成長期以降、掘割は次第にその役割を失い、ゴミの投棄や水質の悪化などが問題として取り上げられるようになった。そのため1970年代には掘割の暗渠化が計画されたが、住民参加による保全活動を通じて掘割は再生され、今日では地域の貴重な観光資源として認められている。その一方で、生活の中に位置づいていたかつての掘割の姿は古い写真として残されるのみであり、当時の掘割について知る住民も少ない。

本研究では住民へのヒアリングと古写真の収集を通じて、戦後初期まで掘割で見られた生活と子どもの遊びを把握し、それらを水路システムや水際空間の特性との関係から考察することで、生活と遊びの場としての掘割について捉える。なお、本研究は旧柳川城下町において地域特性が異なる城内地区・柳河地区・沖端地区の3地区を対象とする(図1)。

1.2. 調査概要

戦後初期までの掘割と生活の関係を調査するため地図・古写真・郷土史誌などによる文献調査を行い、旧柳川市城下町の3地区それぞれの住民に対してヒアリングを行った。ヒアリングは、グループインタビューの形式をとり、70代から90代までの住民、計14名(城内地区5名、柳河地区2名、沖端地区7名)に対して実施した。古写真については昭和初期から昭和30年代頃までの柳川を撮影した書籍より収集した¹⁾。

1.3 対象地区の特徴

A) 城内地区

城内地区は近世まで武士の居住地であった。明治期の武士身分階級の消失に伴って、武士の多くは柳川を後にし、武家屋敷は農地化された。またその後戦後の宅地化などにより住民の入れ替わりは進行し、今日で



図1 対象3地区

は昭和初期の上水道敷設以前から居住する住民はほとんどいない。掘割は埋め立てなどにより数や形が戦前より大きく変化しているが、柳川城郭を形成する外堀と内堀などを中心とした構成については藩政時代の形をとどめている。

B) 柳河地区

柳河地区は旧街道に沿って町屋が連続したほか、下級武士の屋敷や寺社なども存在した。その町割りについては現在でも戦前の形をとどめており、堀に対して汲水場²⁾が連続して続く構成となっている。堀の水は矢部川水系沖端川から取水され、生活用水として用いられたが、昭和2年の上水道敷設後はその役割が次第に薄れた。しかしながら城内地区と同様に水路の構成は戦前の形を残している。

C) 沖端地区

沖端地区は船溜りを中心に形成された漁師町であり、その起源は平家の落人が流れ着いたことにあると言われる³⁾。江戸期には船溜り沿いに商人が住み、武士や農家も隣接して住んでいたとされる。地区の中心を城の外堀から続く堀が通り、現在はそこが川下りの終点として使われている。また堀の水は沖端川の干満に対応して二丁水門から排水を行っている。

2. ヒアリング・古写真にみる各地区の生活・遊び

A) 城内地区

城内地区では、今回のヒアリング調査で協力が得られた住民のうち2名が地区で生まれ育ったものであった。そのうち70代の住民は当時の掘割での遊びを次のように語る。

僕らは御花の裏で泳いでたですよ。三隅の堀が深かった。三隅は渦巻しよったもん。そして底が砂地やったですよ。そしてしじみもいっぱいやった。ここ（三隅）からは台湾藻にのって堀を沖端まで流れていくと「どこでおよぎよるか!」と言って沖端の子どもたちが出てきよったですよ。テリトリーがあったですな。

「御花」とは柳川藩主の別邸であり、この住民が子どもの頃過ごした場所である（図2）⁴⁾。外堀と内堀を結ぶ三隅と呼ばれる堀は水深が深く子どもが泳ぐ場所として適していたという。さらに水流が早いことから水面を覆う台湾藻に乗り堀を下るなど、子どもの恰好の遊び場であった。こうした遊び場は城内地区と隣接する沖端地区で明確に分かれており、その境界ではたびたび両地区の子どもたちが喧嘩をしていたという。また写真1が写すように、子どもたちは掘割の上にかかる橋から飛び込んで遊んでいた。ヒアリングによると橋の下は堀が深く飛び込むことができた。堀に溜まった泥を掻き出す堀干しの際には、橋の下に集まった魚を捕るために子どもたちが集まった。

生活としての掘割の利用については、上水道が整備されて以降、茶碗を洗ったり、洗濯を行ったりする利用が中心であったが、戦後初期の段階でも依然として飲用水として使われることもあったという。

B) 柳河地区

柳河地区では同地区で生まれ育った2名にヒアリング調査を行なった。そのうち80代前半の住民は、成長とともに遊び場を家の付近の掘割から地区北側の沖端川に移していったという（図3）。

私は掘割で小学校2年生まで泳ぎを練習して沖端川に行っていました。潮が引いた時は魚捕りをして、満ちたらそこで泳いでました。橋と橋のけたの間で陣取りみたいな鬼ごっこみたいなのを泳ぎながらしていました。（中略）うなぎとかどじょうをね、どじょうはろうげで捕って川小屋さんに持って行っていましたよ。小遣い稼ぎでした。

さらに子どもたちは、沖端川において干潮時に浅瀬に集まった魚を捕っていた。その際にはろうげと呼ばれる竹製の仕掛け籠を利用していた。また捕れた魚は家に持って帰って食べることもあったが、ウナギやドジョウなどが捕れると川魚屋に持っていき、買い取ってもらったお金をにぎりしめ駄菓子屋へ行くこともあった。こうした魚捕りは木の板を杭でとめたような簡素な造りの掘割でも行われており、堀干しなどで堀の水が減ると、その板の間に潜むドンコやドジョウな

どを捕っていた。

私は欄干橋の城堀で泳いでましたよ。瀬高水門でもおよいでました。ここは早くて深かったです。ここはカッパがいましたよ。カッパは大体深いところに出ると言われてました。危ないところに。水天宮の瓢箪のお守りを付けろと言われて小さい時につけられてました。

上記のように、子どもたちは三柱神社にかかる欄干橋の堀や瀬高水門の堀でも泳いでいたという。写真2のように瀬高水門はもたせ⁵⁾により水の流が早く危険も伴った。大人たちはそのような場所を「カッパがでる」と呼ぶことで子どもたちを戒め、堀で遊ぶ際には決して1人で行くなと言いつけていた。



図2 城内地区の生活と遊びの場面

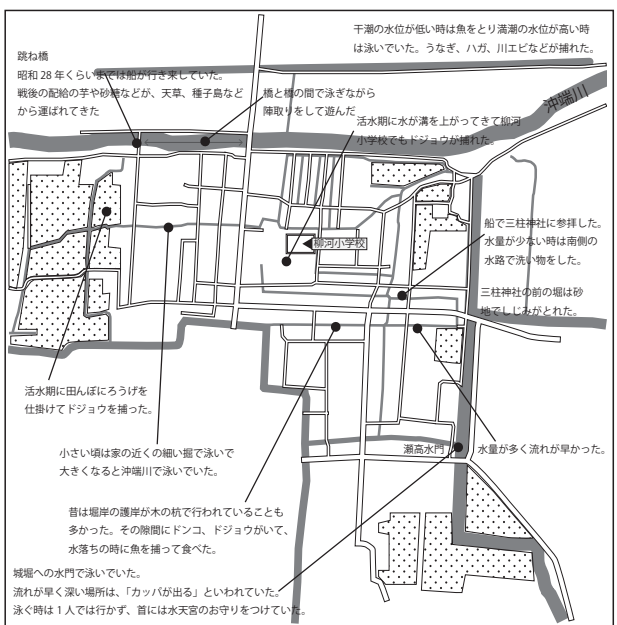


図3 柳河地区の生活と遊びの場面

(戦時中は)茶碗洗ったりなんかする時に掘割に行っていましたね。僕らが子どもの時は綺麗にしました。そういう環境の中で育ちましたね。洗濯なんかをするのは午後から、だから午前中は皿を洗ったり。私たちは自然に水を大切にしました。親から言われなくても周りがそうしてましたから。

戦前に上水道が整備されてからは掘割の水が飲用水として利用されることはなくなったが、水を大切に使う姿勢は言葉だけではなく、実際に水を使うという行為が子どもたちの目の前でされることで引き継がれていったことがわかる。

C) 沖端地区

沖端地区では戦前の漁師町の営みを戦後もとどめていたことから、その姿を捉えた写真が多く残る。写真3・4は同じ場所から撮った船溜りであるが、普段は僅かな間隔で停泊する船が並んでおり、干潮時には川底で貝採りを行なった。また写真5のように、船溜りでは船の隙間に漁で使用する木桶を浮かべて遊ぶ子どもたちの姿も見られた。川岸付近では漁用の網を干す空間を使って遊ぶ様子がみられたり、時には写真6のように仕事の手伝いをする事もあった。

またヒアリングによると、掘割では堀の水を沖端川に排水する二丁水門に飛び込み、排水管を通過して川に飛び出す遊びが行われていたという(写真7)。水を溜めるひょうたん堀では泳いだり、堀干しの際に魚捕りをした(図4)。矢留小学校前の堀の水は流れもあり堀底が砂地で澄んでいた。そのため小学校にプールが整備される昭和30年代まで堀では水泳の授業が行われていた(写真8)。

水天宮前の堀は水中の魚が見えるほど澄んでいた。その堀沿いには汲水場が設けられており、住民らは両側から堀に降りて洗物を行ったり、井戸端会議の場として使っていた。

3. 水路システム・水際空間の特性と遊びの関係

3.1. 汲水場の共同利用と遊び場(柳河地区)

柳河地区の京町では、城堀(二ツ川)から取水し給水を行う掘割が東西に伸び、これを本流として北側に引いた支流が流れていた。永川ら⁶⁾の研究によると、本流に比べて支流は水量が少なく、汲水場の数も本流に偏っていた(図5⁷⁾)。ヒアリングによると柳河地区は上水道敷設が最も早く、それ以降の汲水場は炊事用の水を得るための場所としての機能を失いつつも、本流・支流ともに洗い場として使われ続けた。ただし、支流の水量が少ない時には本流まで行き水を使うなど、汲水場を備えた本流の方が利用頻度が高かった。

このように掘割の用途は時代を経て変化をしつつも、戦後まで共同利用が続いていた。

ヒアリングにおいて語られた同地区の遊び場のうち、幼い子どもたちの遊び場として挙げられたのは本流のように汲水場を持つ掘割であった。これは汲水場を利用する大人たちの目が行き届き、幼い子どもたちにとって安全な遊び場であったからだと考えられる。

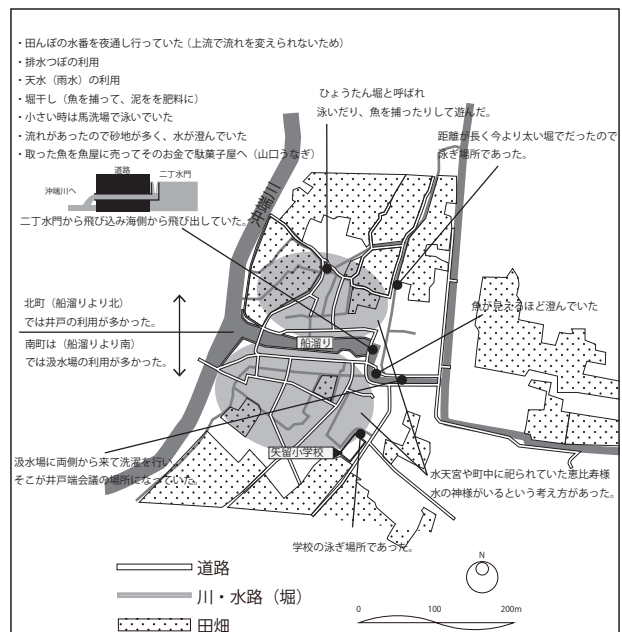


図4 沖端地区の生活と遊びの場面



写真1 橋から飛び込む子どもたち



写真2 瀬高水門のもたせ



写真3 船溜りでの貝採り



写真4 船溜り



写真5 木桶で遊ぶ子ども



写真6 仕事を手伝う子ども



写真7 二丁水門



写真8 矢留小学校前の堀

3.2. 水の流れと遊び場（沖端地区）

沖端地区は船溜りを隔てて南北に分かれている。そのうち北側に位置する西北町の掘割は、上流において鬼童町の堀から田畑を通り流れ込む水を、一度ひょうたん堀に溜めたのち、船溜りへ排出される。このように西北町では、もともと灌漑用水として利用される水が流れてきていたため、掘割の水が飲み水に適しておらず、井戸の利用が中心であった⁸⁾。それに対して南側の浦町の掘割は、下流の干拓地に給水する機能を有していたため水天宮付近から城堀の水を引き込んでおり、水の流れが早く水質が良好であることから飲用水として取水が行われていた。そのため浦町を囲う掘割に汲水場が多く分布している（図6⁹⁾）。ヒアリングによると戦後の汲水場は洗い場として利用されていた。

沖端地区の遊び場としては、西北町付近の掘割の流れが弱いために、水量のあるひょうたん堀が遊び場として選択され、子どもたちが泳いだり魚捕りを行なっ

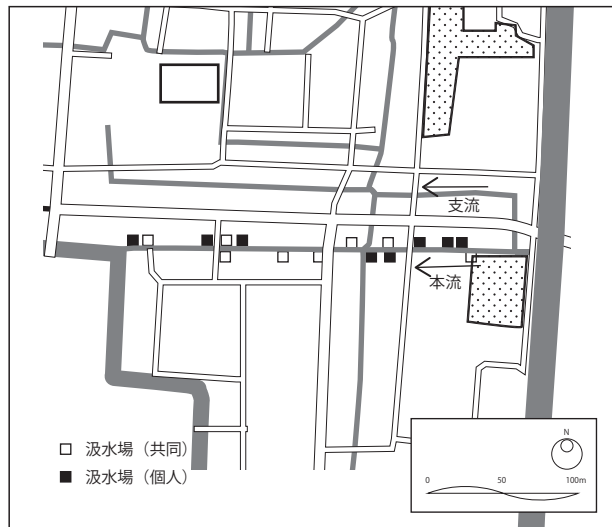


図5 京町の水系

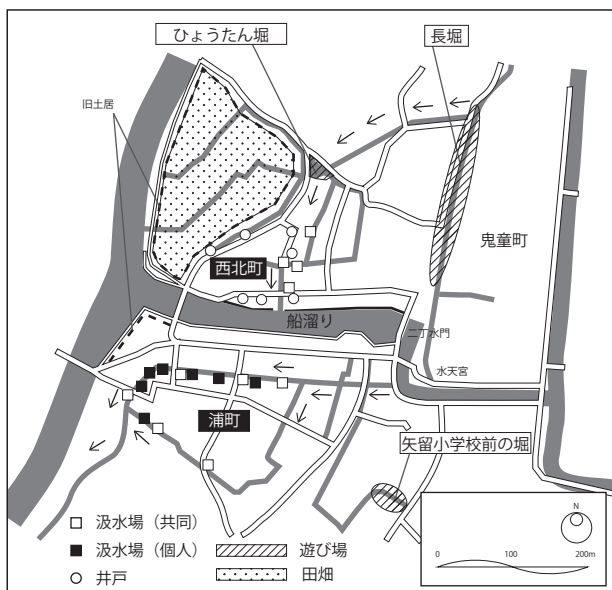


図6 沖端地区西北町・浦町での水系と遊び

た。一方、浦町付近の掘割は、城堀から引き込む水の流れが早く泳ぐ場所として適していたことから、矢留小学校前の堀では水泳の授業が行われた。

このように西北町と浦町は同じ沖端地区にあって、異なる水路システムや水際空間の特徴を有していた。このような地域特性の相違が生活における掘割の水利用の方法の違いに現れていた。また遊び場としては、子どもたちが遊びに適した場所を異なる水の条件のもとで見つけ出していた。

5. まとめ

柳川は、城下町として町人、武士、農民、漁師などさまざまな身分階級の人々が混在して暮らしてきた町である。そしてその中でも掘割は生活用水を供給するための仕組みとして重要な意味をもった。その後掘割の用途は上水道敷設とともに変化した。その中で人々は掘割の特性を理解して、それぞれに適した生活での利用や遊びを行った。中でも子どもたちの遊びは、沖端川に接する柳河地区や沖端地区では干満に合わせて時間帯によって変化したり、堀の深さがある城内地区では堀への飛び込みが行われたりと、川への接地条件や堀の流れや深さなどの要素により地区ごとに異なった。また柳河地区の住民は成長にともなって遊び場所を自分の家付近の堀から沖端川へ移しており、場所によって遊ぶ主体も異なった。このように堀との付き合い方は実際に使うという行為を通して人々の体に染み込んだ。そして使われる掘割は人々により大切にされた。水と人との付き合い方を理解し、新しい付き合い方を考えていくためにも掘割の生活の記憶を記録に変えていかなければならない。

注

- 1) 古写真の収集は、北原白秋・田中善徳：水の構図、アルス、1943、井上孝治：想い出の街、河出書房新社、1989、井上孝治：子どものいた街、河出書房新社、2001、池上康稔：有明海の記憶、弦書房、2006、創立25周年記念誌委員会：あるばむ柳川今昔1981、柳川青年会議所、1981、創立35周年記念誌委員会：柳川今昔1991、柳川青年会議所、1991に基づく。
- 2) 柳川では水汲み場のことを汲水場（くみずば、くんば）などと呼んだ。
- 3) 柳川市史編集委員会・別編部会：新柳川名証図会、柳川市、2002
- 4) 図2、3、4の水路及び道路は、柳川みやま土木組合：柳川市全図1/10000、1952~1955、国土地理院：空中写真（1948年撮影）をもとに作成した。
- 5) 堀に水を溜めておくためのしくみ。ここで取り上げるもたせは堀の一部を狭くしV字型にすることで水の量を調整する役割をもつ。
- 6) 永川優樹・菊地成朋・丸茂悠：京町における通りと水路の共同性：水郷柳川の居住特性に関する研究 その4、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp. 131-132、2002
- 7) 図5の永川優樹・菊地成朋・丸茂悠：京町における通りと水路の共同性：水郷柳川の居住特性に関する研究 その4、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp. 131-132、2002をもとに作成した。
- 8) 石丸崇敬：柳川市沖端地区における漁村集落の形成と変容、九州大学工学部建築学科卒業論文、2006
- 9) 図6の汲水場は石丸崇敬：柳川市沖端地区における漁村集落の形成と変容、九州大学工学部建築学科卒業論文、2006をもとにプロットした。